

皮膚科のトリビア

193

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」, そこから転じて「瑣末なこと」となり, 今では雑学的知識, 豆知識, などを意味する言葉として定着している。

本欄は, 小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ, 連載しています。ご意見等ございましたら, ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第72回日本皮膚科学会西部支部学術大会
から

令和2年10月25日

キトサン含有サプリメントによる
特発性色素性紫斑と柑皮症

70歳代の女性。脂質異常症のため, 1日3~6 g, キトサンを含有する青汁を飲み始めた。

2カ月後から両下腿に点状紫斑を混じる褐色斑が出現し, 大腿や臀部にも拡大した。同時に手掌, 足蹠などは黄色調を帯び, 柑皮症を伴っていた。出血傾向なし。血中カロチンが329.8 $\mu\text{g/dL}$ と上昇。

皮膚生検病理組織像は, リンパ球様細胞の表皮内および血管周囲に浸潤し, 出血を伴っていて, 特発性色素性紫斑と診断。サプリメントのDLSTが209%と陽性。青汁の中止で2カ月後に紫斑が改善した。

一言コメント

「基盤に下肢の静脈うっ滞はあるようだ。ときどき, 下腿のみではなく大腿, 臀部, 上肢に拡大する高齢者をみかけることがあって, 降圧薬が原因かもしれないと思っていたが, サプリメントが原因なのかもしれない。ちなみに, キトサンはカビの細胞壁に存在する窒素含有多糖類だそうだ。」

●第72回日本皮膚科学会西部支部学術大会
から

令和2年10月25日

プロプラノロールがpseudo-
Kaposi sarcomaに効いた

60歳代男性。両足蹠に疼痛を伴う紫褐色のわずかに隆起する局面があり, 3カ月前から増大し疼痛のために歩行困難となった。

皮膚生検の病理組織像は, 真皮全層に血管拡張と内皮細胞の増殖があるが, 悪性所見はなし。ドップラーエコー検査で皮下に複数の動静脈瘤を確認し, pseudo-Kaposi sarcomaと診断。

異常血管の増殖抑制効果を期待して, プロプラノロール1 mg/kgの内服を開始したところ, 徐々に皮膚症状と圧痛が改善し, 3カ月でほとんどが色素沈着のみとなった。

乳児血管腫以外にも, 内皮細胞の異常増殖と伴う疾患の治療薬となりうる。

一言コメント

「治療がむずかしい疾患で, 大学勤務医時代に苦労した経験がある。希少疾患だが症例を集積し正式な保険適用の治療薬になることを期待したい。」

●日本皮膚科学会第892回東京地方会から
令和2年10月17日

特発性浮腫もStewart-Treves症候群の原因になる

60歳代女性。筋萎縮性側索硬化症で寝たきり。

四肢は原疾患のない、いわゆる特発性浮腫の状態が続いていた。1年前から左上腕に紫斑が出現。緩徐に進行したが一部に腫瘤を形成。

病理組織学的に脈管肉腫。Stewart-Treves症候群と診断し、放射線治療を行った。

基礎疾患や手術歴がない特発性浮腫でも、Stewart-Treves症候群の原因になる。

一言コメント

「たしかに、Stewart-Treves症候群は骨盤や腋窩の術後に生じるリンパ浮腫に続発する疾患というイメージだが、こういった普通の浮腫が基礎疾患の場合もありうると知った。気をつけなければならない。」

●第36回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から
令和2年9月22日

デュタステリドでニキビが改善した症例

ニキビを伴う男性型脱毛症の患者2名。デュタステリドの内服開始3カ月後に顔のニキビがほぼ消失した。炎症性皮疹、微小面皰の両方に有効だった。

デュタステリドはテストステロンからのジヒドロテストステロン生成を阻害する5 α -還元酵素I型およびII型の阻害薬である。

I型は皮脂腺に強く発現しているので、デュタステリドの効果によって皮脂腺の肥大化が抑制された結果と考えられる。

一言コメント

「5 α 還元酵素II型は毛乳頭、前立腺に発現しているので、前立腺肥大、男性型脱毛症の治療薬となる。フィナステリドはI型の阻害効果はないので、皮脂腺には影響しない。デュタステリドをニキビの治療に用いることはよくない。あくまでも副次的な効果である。」

●第36回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から
令和2年9月22日

B型肝炎ワクチンによるGianotti症候群

11カ月の男児。3回目のHBワクチン接種後から下痢があり、接種7日目から両頬に丘疹が生じた。

翌日には四肢末梢、とくに前腕と下腿伸側に3 mm 大までの充実性ないし漿液性の丘疹が多発してきた。軽度の肝酵素上昇、HBs抗体陽性からGianotti症候群と診断。2週間の経過で消褪した。

小児の急性発疹症ではワクチン接種歴の聴取が重要である。

一言コメント

「臨床的には誰でもGianotti症候群と診断できる典型的な症例だった。1回目、2回目では何ともなかった。HBs抗原に対する免疫反応なのだろう。国内外の報告が13例とのことだが、何回目の接種後に多いのかは聞き忘れた。」

●第72回日本皮膚科学会西部支部学術大会から
令和2年10月25日

D-dimerは重症のIgA血管炎の病勢マーカーになる

IgA血管炎と診断された4例の比較的高齢の男性例で、D-dimerの値を検討した。3例は消化器症状を伴い、1例は肺胞出血をきたした重症例。

4例とも初期に尿潜血と尿蛋白を認め、D-dimerが上昇していた。全例でステロイド全身投与が行われ、症状の改善とともにD-dimerは病勢に一致して低下した。

D-dimerは第XIII因子活性より鋭敏に病勢に反応し、消化器病変、腎炎、肺胞出血などの合併をある程度予測でき、治療効果の判定にも有用である。

一言コメント

「IgA血管炎でD-dimerが上昇している症例は、とくに消化管出血を合併している可能性が高いので、上部および下部消化管内視鏡を行うべきとのこと。小児では以前から病勢のマーカーとされているようだ。今後検討してみよう。」